講演

チェルノブイリの危険な話*

Lesson from Chernobyl Accident

住 田 健 二**

私が読書をするときには大体、次のどちらかの態勢で取り組む。1つは、ごく限られた数だが、興味の深いものだとその本をしゃぶりつくすべく、かなりの時間をかけて集中的に精読する。このため読み終えた瞬間にまた最初へもどって再読を始めることすらある。だが大抵の場合は、そこになんらかのヒントがないかと読みとばすやり方で、時間の作れる都合に合わせて何回かに分けて読むが、この手で読む本の冊数だけはやたらと多い。それで周囲の人からは乱読・速読のベテランと思われているらしい。

そこを見込まれたのか、事故から2年もたつと、“チェルノブイリ炉”の事故を扱った本も相当な数が出版されているので、その中から適当なものを取り上げて紹介でもと誘いをかけられ、ざっと20冊ほどに目を通してみた。中には随分ひどい際ものがあり、表題とか副題にチェルノブイリをうたいながら、大急ぎで書き足した数ページだけがその関連で、ほとんどTMIの話ばかりといったものもあり、世間の関心の高さの割合にはもうひとつ読みごたえのあるものが少ないのが不思議に思える。

注目に価するルポ

そうした中で、私が直ちに再読した本がある。それはソ連で出版され、邦訳が出ているユーリー・シチュエルバク著、松岡信夫訳『チェルノブイリからの証言、1987』（技術と人間刊行、1988）で、形式を重んじる技術報告の形では伝えられにくい生々しい話が多数あり、私達日本人の情報収集能力ではどうしても確認できなかった疑問点がかなり確認できたことも含め、実に教えられることの多い本であった。事故の処理の中核にあり、最近原因不明の自殺が伝えられたレガソフ博士の率直な反省の言葉、例えば、「今日では人間から技術を守らなければならない。」という言葉には多くの教訓が満ちている。

また、かの地でささやかれていた噂で、事故1ヶ月後にソ連へ行行った私の耳にも入っていたことが、活字としてソ連国内で公然の事実として認知され出版され

たことにも時代の変化を感じさせる。あの国ですらここまでといったら失礼になるのだろうが、体制の欠陥を暴露する苦痛に耐えてあえて公表させた。いや、させざるを得なかった政府当事者の態度に、いわゆる“ペレストロイカ”がなぜ必要になったかを感じる。

この本の最大の強みは現地へ足を踏み入れ、関係者へ直接インタビューした材料から構成されていることで、間接情報や想像で意図的な余計なものが補充され勝ちな西側の本とはまるで迫力が違う。しかしそれ以上に、私は科学的な冷静さを失っていない筆者の目と説得力のある説明に痛く感心した。再読の段階で、「前書き」に筆者が単なるジャーナリストではなく、医師としての職歴をもつことを記していたのを読み落としていたのに気付く、なるほどと頷いたのである。多分専門家達の精密なチェックもなされたのであろう。意地悪な立場から読んでも説明や事実関係にはほとんど矛盾がなく、恐らくその正確さは事実に基づく故と思われる。ひょっとすると、一般の方にはあまり面白くない本なのかも知れないが、原子力や巨大産業の安全に関心を持つ人には一読を薦めたい。

ただ、犠牲者を一方的に美化する説明は気になる。消防隊員に放射線被曝量の予告がなされないで、ただ危険性は各自の判断で予知しつつ突入したとされた点を確認するにつれ、あの勇者達の死が本当に不可避だったかどうかまで食い込んでほしかった。それ以上は沈黙となるのが今の限界であろうか。5月上旬の作業ですら「志願者一步前へ」との上官の声に全員一步前へ出たとの話、危険度の予告がないようであり胸が痛む。

ハンドブックとしては

次の本はすぐ再読したわけではないが、事実の経過や発表された数字の引用に便利な本として身近に置く

* 本稿は1988年6月27日、本会関西支部と関西原子力懇談会共催の“原子力の夕べ”での講演の要約である。

** Kenji SUMITA, 大阪大学工学部 (Fac. of Eng., Osaka Univ.)
(1988年7月18日記)

ことにしたのが、朝日新聞原発問題取材班『地球被曝』(朝日新聞刊行、1987)であった。間違いも目立たないし、なにより煽情的な誇張がないのがよい。ただし私にとっては、よくまとまったハンドブックであって、この本から今さら新事実や考えもしなかった見方を教わることはほとんどなかった。つまり、日本の有能な記者諸君が入手した材料は、私に届いた情報の範囲の外へは大きくは踏み出していないように思える。現地での取材が困難で、政府筋やIAEA筋の情報に頼らざるを得なかった本事故の報道の特殊性によるものであろう。またソ連や東欧圏以外の西側各地での反応はさすがによく捕捉されているが、一番問題のソ連国内の深刻な動揺やソ連と東欧諸国間の微妙なやりとりには筆が及んでいない。この辺は米国あたりの出版物の厳しい観察や裏話とは違った印象をうける。

あえて言わしてもらおうと、政治や経済と科学技術開発のからみを国内問題に絞り込み勝ちで、国際面での本事故の背景や影響評価への突っ込みが不足している。老婆心ながら、この本1冊でこの大事故を総合的に勉強しえた気になって貰いたくない気がする。しかし、次に扱うような本が今や本事故に関する代表的なものになってくると、言い過ぎていないこの本の良さが改めてわかる。

「危険な話」の読後感

さて最近話題になり、どの書店へ行っても見かけるベストセラー、広瀬 隆著『危険な話—チェルノブイリと日本の運命』(八月書館刊行、1987)を無視するわけにはゆくまい。この本は刊行されて1年余りで、すでに30版以上を重ね30万部も売れたとか聞く。私の手元にあるのは初版本で、出た直後に買い求め、少し読みかけてあまりの内容に閉口して本棚に突っ込んでしまっていた。なぜかという、冒頭から技術的に杜撰な説明が続出し、これはきっと、かの高名な広瀬氏の名のもとに、ゴースト・ライターが書いたのだと勝手に思い込んだからである。立論にかなりの強引さはあるものの、「ジョン・ウェインは何故死んだか」は面白い読み物だったし、問題提起としては着眼点の良さを私なりに評価していたからである。

ところが、広瀬氏の講演会が評判を呼び、その本が売れに売れていると聞いたので改めて本棚から問題の本を取り出してみた。そして間違いやら矛盾やらにマークしながら読みかけたが、講演速記を基にした原稿だそうなので説明の不備や多少の誇張は見逃すことにしても、あまりにも基本的な事項についての誤解や飛躍・誇張が沢山あって、依然として不審の気持にとらわ

れる。どうみてもこの種の間違ひは、科学や技術の基礎教育と思考訓練を受けた理工系の人間の論述には起こり難いような種類のものではあった。そこで、この人はきつと文系の教育を主に受けた根っからの“作家”なんだらうと思いつつ先へ進むと、終わり近くで日本の科学・技術がすべて海外の模倣に過ぎぬと一刀両断され、自分の技術者7年の経歴からの判断だといわれびっくりさせられた。

その後見たある雑誌での対談記事での紹介には、大学の化学関係の学科出身、材料研究に従事してから医学書の翻訳に入った経歴と出ていたが、今でも私には、その経歴とこの本での彼の記述がどうしてもつながらない。説明を文字通り受け取る限り、科学や技術を背景に議論する姿勢からはあまりにも遠く、本当の問題点を理解しているのかと疑いたくなるからである。「原子力発電の危険性」という大問題をわかり易く論じるのに、そんなことは小さい傷であるという気なのだろうか。同氏の勉強不足のせいではなく、大衆相手にわかり易く呼び掛けるため、ついつい口がすべっていいすぎたのだろうか。しかし、この内容で刊行1年後にも内容の改訂が全くなされていないままに発売されている状態は、どうも見逃し難い。

私にはその辺の底抜けに近い大ざっぱさが、この本なり、この人の議論の致命的な限界であるように思える。読者にはただ恐怖心だけが残ればよいのかしら。SF小説ならそれでもいいだろう。しかし、真剣な問題提起なら、広瀬氏個人の名誉のためにも、「まず、恐怖をあおって人の関心を集める、それからセールスへ入れ」という、あのきわどい悪徳商法との違いを示してほしい。この本に出てくる数字や説明は、引用不可能という巷の声(技術的背景を持った反原発運動家の嘆きでもあるが)はそう外れてはいまい。問題提起に焦るあまり、論理の飛躍、誇大な表現、無用の恐怖の宣告おかまいなしでは、表現の巧みさを愉しむフィクションの世界はつくれても、現実の問題の解決には役立つまい。平凡なことだが、事実と真理の集積の上には科学や技術は成立しないからである。面白くもない、大した飛躍もないような日々の努力の蓄積が前進をもたらす。

原子力の世界もその例外ではない。これまでも何度か指摘してきたことだが、人々は原爆のすさまじい破壊力を平和利用に転用すれば、きっと画期的な幸福があるはずと思い勝ちであった。だがそれは願望ではあっても確約ではなかったことを忘れてはならない。原子力だけに通用するような特別な魔術はない。日本の

技術とともに前進するのが原子力の安全の姿であろう。広瀬氏はこのことをネガティブな言い方でとらえ、お前達が努力しても駄目と断言したいらしい。それが不勉強の誤解に基づくのか、悪意の表現なのか、私はまだ結論を出し難いが、とにかく今でも日本の科学や技術は模倣のレベルに過ぎぬといいきることで、自らの立場を宣言したものと受け取れる。技術者の過大な自信が驕りになってはいけませんが、原子力関係者への警告の言葉としては、あまりにも対象を拡大誇張した表現ではないのか。

これまでの推進論も反対論も、確かに大衆には理解し難い土俵で、難しい専門用語を使い議論し合っていて、他分野の技術者にすら理解が得難いものだった。閉じた世界での特殊な出来事としての取扱いに安住していた傾向は強く反省を要する。だからといって、技術者全体への侮辱すれすれの表現までして大衆にアピールすることは、推進派のご都合主義を弾劾しようとする人の取るべき態度ではあるまい。なお、私の批判が言いすぎかどうか、実例を1つ上げて、彼の表現力による巧みなトリック的説明の進め方を見てもらうことにしよう。(p. 209 から)

「あらゆる原子炉の部品が、強烈な放射線を受けて傷んでいる。蒸気発生器だけでなく、人間の体が放射線を受けてガンを生じるように、金属もただ原子と原子が結合しているだけの材料ですから、放射線の強烈なエネルギーによって原子がハネ飛ばされ、穴をあけたり、一瞬にして巨大な裂け目を作ったりします。一中略—この放射線による材料劣化については、全世界にデータがありません。毎日毎日、炉心から出る中性子が金属に激しく衝突し、そのため原子炉の圧力容器そのものが前触れもなくバリバリと破壊する可能性が明らかになったのは、まだ5年ほど前のことです。原因不明です。あわてて研究を始めましたが、実はいまは巨大原子炉を運転しながら、私達の命と引き換えに実験データを集めている。つまりこれはまた、壮大な生体実験中です。」

蒸気発生器での腐食問題は確かに厄介なものだが、放射線損傷には関係なく高温水を利用するボイラ共通の話。金属がただ原子と原子が結合しているだけの材料という決めつけ方には、この頃は高校の理科でも金属結合まで教えていますよといいたくなる。もし、これを普通に説明するなら、鉄のような損傷の起こりにくい金属材料ですら、大線量照射下では脆弱化が起こ

るので慎重に特性変化を……とでも説明すべきで、生体のような傷つき易いものを例にとるのはおかしい。多分、「命と引き換えの壮大な生体実験中」という結論での脅迫的表現の枕言葉なのだろう。原子が跳ねとぶと直ちに穴が開くような表現や、放射線による損傷のデータが世界中にないとはこれまた凄い誇張だ。20～30年運転後の実炉での炉容器の寿命に慎重論があるのは事実で、5年前頃からこの問題が表面化してきたのだが、5年前にわかったとか、原因不明、慌てて研究を開始とかは勝手な想像でしかない。いたる所にこのような聞きかじりの早飲込みの説明が出てくるので、私は未だにゴースト・ライター説を捨て切れないでいる。

なお、彼の筆になるものとしては、『チェルノブイリの少年たち』(太郎次郎社刊行、1988)が出ている。ニヒルな暗い面の目立つ作品だが文学作品として書かれているので、ストーリーに文句はつけたくない。しかし「後書き」に、これは事実だとして書いてある内容については、表現が前著より抑えられてはいるがやはり疑問だらけである。地下情報として万を越す死者が出たかのようなことを書いているが、どのようにしてその事実を確認したのだろうか。引用での書換えの乱雑さは前著でもそうだが、この本では事故直後の混乱より体制の弾圧を強調したいらしい表現が目立つ。同著者の集英社文庫版『東京に原発を!』(1986)は、同一表題の既刊単行本とは内容が大きく変わっていて、チェルノブイリ事故のことが大量に扱われている。ただし論旨は『危険な話』と同じ。あえていえば、こちらの方が表現が少しばかりおとなしい。ただ論理の粗雑さは同じだ。

講演の後、やはりベストセラーといわれながら中々手に入らない甘蔗珠恵子著『まだまにあうのなら』(地湧社、1987)を読む機会を得た。内容は『危険な話』の学習報告といえるが、自己宣伝めいた作意的誇張がなく真面目な訴えが感じられる。それだけにこの人の主張の背景となっている食品汚染等の情報源の不正確さや基礎的な誤解をなんとかして解きたいと思った。

最後に、科学的な客観性を持ちかつ問題点を解説したような研究者、技術者向けの「チェルノブイリ事故」の解説書は未だ出ていない。TMI のときも2年経つと海外ではボツボツこの種の本が姿をみせている。困難な仕事ではあるが、官庁や電力界の手によらず、本学会あたりで企画できないものか。それが『危険な話』を一人歩きさせないことにも通じると思うのだが。